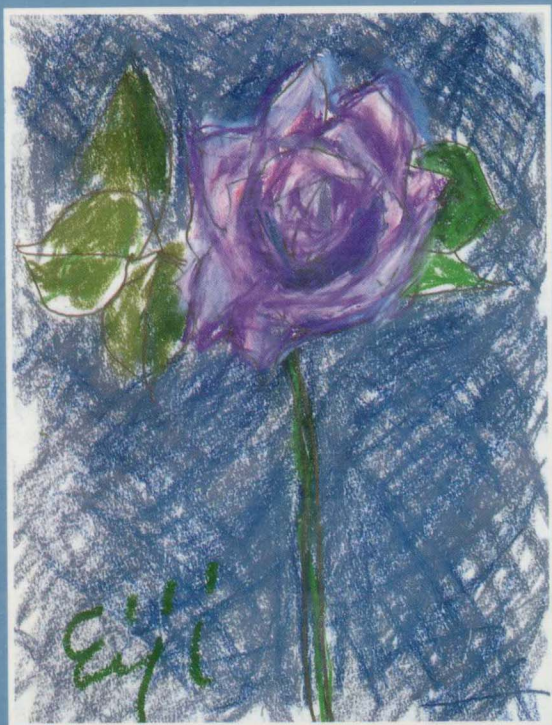


鶏冠詩人伝

庄野 英二



創元社

鶏冠詩人伝

庄野 英二



創元社

鶏冠詩人伝

一九九〇年三月二〇日 第一版第一印刷発行

著者 庄野英二 しょうの えいじ

発行者 矢部文治

印刷所 太洋社

発行所 創元社

大阪市北区西天満一ノ四ノ二

06-363-2531

東京支店 東京都新宿区山吹町三三四一

03-269-1051

ISBN 4-422-92010-3

©1990 Printed in Japan

落丁・乱丁はお取替えいたします。

検印省略

著者略歴

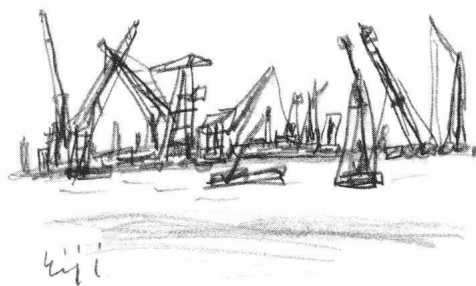
1915年（大正4年）生まれ。関西学院大学文学部卒。日本文芸家協会、日本エッセイスト・クラブ、日本ペンクラブ会員。

『ロッテルダムの灯』で日本エッセイスト・クラブ賞、大阪府芸術賞、『星の牧場』で日本児童文学者協会賞、産経児童出版文化賞、野間児童文芸賞『雲の中のにじ』でNHK 児童文学奨励賞、『アルファベット群島』で赤い鳥文学賞をうける。

著書『庄野英二全集』11巻のほか多数。

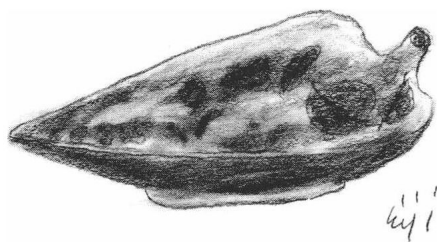
一、	『二房の葡萄』	5
二、	風・光・力	31
三、	冬のバラ	57
四、	じゃがたらうた	85
五、	巢鴨プリズン	121
六、	鶏冠詩人	153
七、	煙霞宿痾	187
八、	木曜島	211
九、	「苜蓿」	241
十、	映画「星の牧場」	261
十一、	挽歌	281

あとがき



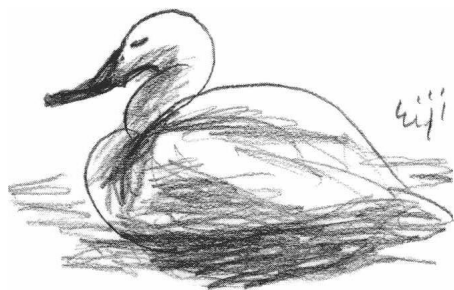
装丁·插画
著者

鷄
冠
詩
人
伝



一

『二房の葡萄』



私が生れて最初に手にした本は、大型の「巖谷小波童話」であつた。同じころ、もう一、二冊、「さざなみ童話」といったタイトルの本を読んでいる。

これらの本は、小学校（私立帝塚山学院小学部）の校長であつた父が自分で読むために買ったものか、私と、三歳上の兄のために買い与えたものなのか、後になるまでそのようなことは覚えてもみなかった。

奇しくも、私は後年、児童文学の仕事にかかわりを持つようになった。小波はわが国近代児童文学の始祖である。

巖谷小波に、巖谷大四という子息がいる。彼はある時期書評新聞「週刊読書人」のコラムを執筆していた。私が一九六〇年に『ロッテルダムの灯』と題したエッセイ集を出版したとき、彼はコラムに過分の賛辞を書いてくれて有難かつた。

その後、文学関係のパーティーで、お目にかかる機会もあつたが、巖谷小波について質問したことはなかった。

私は、一九七五年（昭和五十）四月末から五月にかけて、モスクワ、東欧の旅をした。帰途、モスクワから東京行のアエロフロート機に乗ることになっていたが、航空会社の不手際で、予

定した飛行機に搭乗することができなかった。抗議をしても蛙のつらに水であった。私は、指定されたホテル三階の一室に軟禁同様に拘束されてしまった。外出はおるか、四階へ行くことも二階へ行くことも許されなかった。

二日遅れてやっと搭乗することができた。搭乗機はヨーロッパからの途中寄港で、客席はほとんど満員に近かった。

トラップを昇って機内に入るや、前の方の座席に巖谷大四が坐っていて、私の顔を発見するや、ニコニコと微笑みかけてくれた。巖谷大四は温容の紳士で、私は笑顔のない彼の素顔を一度も見ただけではない。

私はやっと飛行機に乗ったうれしさと、巖谷大四の顔を見た喜びで、モスクワに二日間足停めされた不満を一気にしゃべりまくったようであった。

その後なにかの会合で巖谷大四と顔を合せると、必ず「庄野さんはあの時、とっても憤慨していたね」

と言われるので、てれくさくてならない。

巖谷大四は、一九一五年（大正四）生れで私と同年である。日本の文芸家たちの同業組合のような「日本文芸家協会」という団体がある。巖谷大四も私も所属している。

「日本文芸家協会」では、会員が、満七十歳（その後七十五歳に改められた）を迎える年の五月の総会で、長寿のお祝いにスコットランド製ひざ掛赤毛布を贈るきまりがある。

一九八五年（昭和六十）五月の総会で私は、巖谷大四や串田孫一と共に毛布を頂いた。その日のパーティーで、私は初めて巖谷に大四の名前の由来を確認した。想像していたとおり、大正四年の生れで大四と名づけられていたのであった。

以来、私は「硯友社」を、尾崎紅葉や川上眉山などとおこした巖谷小波に身近な懐かしみを抱くようになった。私の父も、「おとぎ世界」というような題の小さな雑誌を二、三号発行していたことがあるらしい。

「小波童話」を読んだころ、一九二二年（大正十一）、私は帝塚山学院幼稚園に入園した。私が入った幼稚園に限らず、どこの幼稚園でも当時澄宮（現三笠宮）の詞に曲のついた童謡を盛んに教えられた。澄宮は私と同じ年でもあったので、私は子供ながら澄宮の詩才に感心した。今も次のような童謡がうろ覚えの記憶にある。

サトウ

サトウハ アマクテ シロクテ オイシクテ ギュウニユウ ナンカニ イレテノム

デントウ

宮^{ミヤ}クンガ イソギ ゴシヨヨリ カエルトキ マチニ デントウ ツキニケルカナ

坂道

四十四、五ノ バアガ 車ヲオシテ サカミチノボリケルラン

田母沢川

タモザワガワワ ナンデモ ナガセ ミナナガセ

うる覚えのことを書いて、三笠宮には、申し分けないが、詞の意味に間違いはないつもりだ。三笠宮は幼少のころ、自分のことを「宮くん」と称していたようである。私は、関西学院を卒業した春、栃木日光町清滝に職を得て日光で一年間暮すことになった。そして田母沢川を初めて見た。日光に御用邸があったのだ。

「小波童話」に続いて読んだのが、有島武郎の童話集『一房の葡萄』の初版本である。父に勧められて読んだのではなく、家にあったから読んだだけであった。

主人公の少年は、横浜港の海岸沿いの道を歩いて、毎日、西洋人の子供も混っている小学校に通う。少年は港に碇泊している汽船の喫水線に近い部分の洋紅色と海の藍色がたまらなく好きであった。

少年は画を描くのが好きであったが、彼の持っている絵具では「洋紅色」と「藍色」がうまく出なかった。

西洋人の友だちは、「洋紅色」と「藍色」が美しく発色する上等の絵具を持っていた。

ある秋の日のひる休み、少年は魔がさして思わず二種の絵具を盗んでしまう。

事件が発覚する。少年は、体格のよい西洋人の子供たちに引き立てられて、別棟二階の受持の女の先生の部屋へ連れて行かれる。

少年は、白いリンネルの服を着た受持の若い先生が好きであつた。

泣きじゃくっている少年を部屋に残して先生は授業に出かけて行く。

少年はいつしかうたたねをしてしまっていた。やがて、先生が帰つてきた。先生はニコリほほえんで、「あした必ず学校へくるのですよ」

と優しく諭し、少年はこつくりをする。

先生は、白いリンネルの服の上半身を窓からのりだして、銀色のはさみで一房の葡萄を摘みとり少年に与えた。

少年は、その時の先生の美しい手と、白い粉をふいた葡萄の色が何年たつても鮮やかに思い出されるのであつた。

私はこの童話の終りの部分を読むたびにエクスタシーに陥る。

私は、少年時から、そして今もマリア崇拜のような感情が心の底にあるが、それは、『一房の葡萄』の若い女の先生に由来しているのかもしれないと思つてゐる。

『一房の葡萄』が与えた影響はそれだけではなかった。『洋紅色』『藍色』『白いリンネルの服』

「粉をふいた紫色の葡萄」「銀のはさみ」などによつて、私に色彩の感覚を目覚めさせてくれたことであつた。

小学生のころの読書で、思い出深い一冊の本がある。この本のことを知っている人は、恐らく作者と、その家族ぐらいではないか。私は機会があれば作者に一度お目にかかりたいと思つてしたが、わざわざ会いにでかけるだけの気持もない。お会いしない方がよいのだ。しかし、感謝の気持だけはお伝えしたい。

本の名は忘れてしまった。紫色クロス製本の袖珍本で、著者は西村アヤ。

西村アヤは、文化学院創立者西村伊作の娘であつた。この本を出版したのは、西村アヤが女学校の生徒の時である。伊作の子とはいえ、もちろん無名の少女の作であつた。いや作品というようなものではなくて、作者が箱根か軽井沢の別荘で、夏休みを過した時の文章をただ集めただけのようなものであつた。

世間一般の女学生であれば、このような本を出版できるはずもないのだが、西村伊作のような父親なればこそこんな本を上梓したのであつた。

短文を集めただけのものであつたが、私は不思議に興味があつた。内容は漠として思い出すこともできない。作者が自分の年齢に近いことに親近の感情を抱いたのかもしれない。

私は、本というものは、ストーリーらしいストーリーが無くても、面白く読めるものだということを幼いながらに体験した。

西村アヤの本を読んだのが原因かどうかそれは詮索できないが、私は後にエッセイや、紀行文を愛するようになった。

西村アヤの本は当然父が買ったものであった。父がなぜ西村アヤなぞの本を買っていたのか、私は成人してから理解できるようになった。

私の父は、大正六年に創設された帝塚山学院の初代院長であった。（最初は小学校だけであったが、幼稚園や女学校を併設し、戦後は短期大学、大学まで設置された。）

父は自由主義的な私学教育にビジョンを描いていた。大正初期には、ペスタロッチ主義の玉川学園、羽仁もと子の自由学園、成城学園、西村伊作の文化学院など個性的な私立学校が続々と誕生していた。父は東京の私学に劣らない学院を建設しようと理想に燃えていた。西村アヤという無名の少女の本を買ったのも西村伊作に対する関心のあらわれだったのだと思われる。

一九六九年（昭和四十四）五月、私は講談社の依頼で、童話『にぎやかな家』を出版している。この本を書くとき、私の頭の中に、西村アヤの本の思い出があった。私はストーリーのない、エッセイを集めたようなもので、私の家と家族のことを一冊の童話にまとめたいと思った。現在住んでいる家を建てた時のこと、庭の植物のこと、子供たちの部屋の愛称、飼っているオウムやニワトリ、家の中にあるスプニアの品々、等々を断片的に書いて組み立ててみた。一風変った童話で、気に入りの作である。

坪田譲治は『にぎやかな家』を次のように批評した。

「庄野は書きたいことが一杯あって、それでたまらないかのように一気に書いている」

島崎藤村の『おさなものがたり』も父の書架にあったのでくり返して読んだ。くり返して読んだのは面白いからではなかった。切りつめた暮しをしている父母は、子供雑誌や童話をむやみに買わなかった。そのために私は、『おさなものがたり』をくり返して読むより仕方がなかった。「とうさんは」「とうさんは」で書きだしが毎章同じの、木曾や、銀座泰明小学校に通ったころの思い出に私は少しの興味も持てなかった。

児童文学者関英雄に聞いた話であるが、彼が「日本児童文学者協会」の理事長をしている時代に、新宿「伊勢丹」で「児童文学展」という催しがあった。皇太子妃美智子（現皇后）が来場し、関は案内をした。美智子は『おさなものがたり』を置いてあるケースの前で足を停め関に質問をした。

「『おさなものがたり』を子供たちは興味深く読んでいるのでしょうか？」

そのとき、関英雄がどのように返事をしたのか私は忘れたが、私は美智子の質問がうれしくてならなかった。恐らく彼女も、教養深い両親から幼時にこの本を与えられたのであろう。そして私同様の読後感を抱いたのではあるまいか。

皇太子妃が決定した日の新聞記事を私は克明に覚えている。美智子と記者団との一問一答が掲載されていた。その中に、

「愛読書の名を挙げてください」

という質問があり、美智子は次のように答えている。

「愛読書——子供のときから一番親しんできたという意味でお答えするならば、それはA・A・ミルンの『熊のプーサン』です」

私は彼女の聡明な返答ぶりに敬服した。

私の幼いころの読書で、強く印象に残っているのは、『ロビンソンクルーソー漂流記』である。確か、小学校五年生の冬休みの終りに近い日であった。父は、当時中学生であった兄と、私を難波の盛り場へ洋食を食べに連れていった。

その日、書店で兄弟は一冊ずつ本を買ってもらった。兄は、兄の希望で石川啄木の『一握の砂』、私は自分で選んだのか、父が選んだのか忘れたが、『ロビンソンクルーソー漂流記』を買ってもらった。

私は、その晩興奮しながら一気に読み切った。私の人生で最初の強烈な読書体験であった。

『ロビンソン』を徹夜で読破したために、翌日まだ手をつけていなかった冬休みの宿題を片づけるために半泣きの状態で夜を徹した。

若松賤子訳の『小公子』も父の書架にあって読んだ。あの古風な翻訳文にもなれると面白くなり返して読んだ。

父の書架には、初版の『夏目漱石』『有島武郎』『岡本一平』などの個人全集もあり、昔の本にはルビがついていたので『坊っちゃん』や『我輩は猫である』など子供読み物のつもりで読